

15:30-18:00

大討論会 「社会と場面のコンテクストから言語の歴史を見ると何が見えるか？」
—歴史社会言語学・歴史語用論の現在そして未来—

司会：高田博行（学習院大学）、椎名美智（法政大学）

指定討論者による5つのテーゼ

1. 小野寺典子（青山学院大学）

歴史語用論は、language in use 研究であることを意識してこそ成り立つ言語学の分野であり、「使用される言語」の変遷を見るために話しことば分析は重要である。

2. 青木博史（九州大学）

「歴史語用論」という枠組みを用いることによって、何が新しく見えてくるのか、どのような利点があるのかを示すべきである。

3. 堀田隆一（慶應義塾大学）

21世紀の歴史社会言語学は、古くからある問題に新たな衝撃を与え、言語変化を含む歴史言語学の諸問題に活気をもたらすものである。

4. 家入葉子（京都大学）

「歴史社会言語学」「歴史語用論」の立ち位置と定義については、扱う言語や時代の枠組みを超えた対話が必要である。

5. 堀江薫（名古屋大学）

相対的に若い研究分野である「歴史語用論」と「歴史社会言語学」の連携は、ひいては、語用論と社会言語学の距離感を縮める。